弘前大学
広報誌

ひろだい

vol. 24
2015.3

特集

高度実践被ばく医療人材育成プロジェクトから、
「放射線看護高度看護実践者の養成」がスタート。

弘前大学大学院 保健学研究科 健康支援科学領域 健康増進科学分野 教授
西沢 義子

弘前大学大学院 保健学研究科 健康支援科学領域 障害保健学分野 教授
野戸 結花

44年振りのリニューアルオープン
「弘前大学附属図書館」
弘前大学 附属図書館長・教育学部教授　**郡　千寿子**

チーム・オール弘前がつなぐ地域と学生の絆
「弘前大学ボランティアセンター」
弘前大学理事・副学長　弘前大学ボランティアセンター長
大河原　隆

弘前大学人文学部教授　弘前大学ボランティアセンター副センター長
李　永俊

［学内トピックス］話題の広場から
ダイドードリンコ株式会社との共同研究開始で合意 他

特集

高度実践被ばく医療人材育成プロジェクトから、「放射線看護高度看護実践者の養成」がスタート。

高度実践看護教育部門メンバーと事務スタッフ

弘前大学大学院保健学研究科の博士前期課程に、この４月から「放射線看護高度看護実践コース」が新設されます。目的は“放射線看護におけるプロフェッショナルの育成”。今後は放射線被ばくや放射線防護に関する専門知識・技術を身につけ、放射線に関連した健康問題に向き合える、高度で実践的な看護活動を担う人材の育成を目指します。

試されることになった被ばく医療への取り組み

青森県は国のエネルギー政策によって多くの原子力関連施設を抱えています。その中にあって国立大学法人である弘前大学は、その地域的特性から強い使命感を持って「緊急被ばく医療」への取り組みを早くから推進してきました。平成２０年には大学院保健学研究科を中心に、看護師をはじめとしたコメディカルの人材育成に着手、平成２１年に大学附置施設として「弘前大学被ばく医療教育研究施設」（現・被ばく医療総合研究所）を設置。また平成２２年に完成した「高度救命救急センター」の大きな柱の一つが、有事の際の緊急被ばく医療ということからも弘前大学の強い決意がうかがえます。

平成２５年度から５ヵ年計画で始まった「高度実践被ばく医療人材育成プロジェクト」は、文部科学省特別経費事業として平成２０年度から２４年度にかけて実施された「緊急被ばく医療人材育成プロジェクト」が基盤となっています。この旧プロジェクトでは、教員研修や研究による教員の実践力強化を積み重ねたうえで、保健学科学生の学部教育・博士前期課程における大学院教育・県内の医療従事者を対象とした再教育を３本柱に掲げ進められてきました。こうした取り組みのさなか、平成２３年３月１１日の東日本大震災において福島第一原子力発電所事故が発生。弘前大学では直後から福島県に支援のための人材を多数派遣することとなり、図らずも支援活動を通じてプロジェクトの成果を確認する機会を得ることになりました。

震災後に福島県入りし支援活動にあたった保健学研究科の野戸結花教授は、「それまでの被ばく医療というのは、使うことがないかもしれないという中で学んでいかなければならないものでした。しかし原発事故が起こったことで私たち医療従事者の意識が大きく変わることになりました」と当時を振り返り、「それまでの知識は断片的なもので、状況が整った中でどうするのかということしかやってきませんでした。しかし被災地ではそれぞれ状況も環境も違います。課題がある中でもどう動けばいいのか瞬時に判断できたのは、やはりこれまで学んできた“被ばく医療”のベースがあったからこそ」と話します。

現場から見えてきた課題に向き合うプロジェクト

しかしながら被災地では、放射線被ばくが絡む複雑な健康問題を抱えた患者や家族に、現場でしっかりと対応できる人材が強く求められていることを誰もが感じていました。さらに想定を超えた多くの課題「避難住民への対応や心のケア」「患者の受け入れや地域住民の不安に応える相談活動」「放射線リスクコミュニケーションの必要性」「中・長期的放射線影響に関する研究者の絶対的不足」、加えて放射線に対する人々の不安が原発事故だけに留まらず、放射線診療に伴う医療被ばくにまで及ぶようになったことなどが浮き彫りになります。こうした現場での経験から多くの看護師や教職員、そして学生たちが“高度実践”の必要性

「福島県の子どもさんとお母様との遊びと語りのプロジェクト」への参加

東京医科歯科大学大学院共同災害看護学専攻大学院生・教員の視察研修

プロジェクトのパンフレットや報告書

「医用放射線利用の最新知見と放射線検査に関する看護相談に向けて」をテーマに開かれた第3回高度実践看護教育部門セミナー

第2回高度実践看護教育部門セミナーでの様子

を痛感したことが、新プロジェクトのもとで新設されることになった「放射線看護高度看護実践コース」に繋がっていきます。

旧プロジェクトのもとに開設された大学院博士前期課程「被ばく医療コース」は2年間30単位で修了しますが、「放射線看護高度看護実践コース」は演習や実習を含む専門科目が38単位、これに課題研究を加え42単位と高度な実践力を修得するための教育が目標。学生たちは看護倫理学やフィジカルアセスメントなどの共通科目のほかに、放射線被ばくや放射線防護、被ばく医療、放射線診療に関する科目と対象者の理解や看護支援に関する科目を学ぶ。その上で、有事の際に多職種との連携のもと専門性の高いリーダーシップを発揮し被災者の支援を行う「被ばく医療における看護」、放射線の医学利用における利益とリスクを理解し放射線防護の視点に立った看護ケア・看護管理を行う「医用放射線利用に伴う看護」、どちらかを選び特化した専門教育を受けることでそれぞれのスペシャリストを目指すことになります。

スペシャリスト養成を弘前大学が担うべき意味

一般的に大学院などで学ぶ場合、カリキュラムの過密さから休職や退職を余儀なくされることが多いのですが、ここでは仕事を続けながら教育を受けられる工夫がされています。机上で学ぶものに限られますが、インターネットを通じて繰り返し学習できる「eラーニング」やテレビ会議システムを使った「遠隔授業」など。「遠隔授業」に関しては、単位互換協定を結ぶ鹿児島大学の単位も認定されるので学生にとっては選択肢が広がります。対面で行うものに関しても個々の学生に配慮した授業にしていく予定。いずれにしても少人数にマンツーマンに近い形で、放射線看護分野における看護職のスペシャリスト「専門看護師」認定を視野に入れた高度で実践的な教育が提供されます。

「事故から4年が経った今でも福島では低線量被ばくが続いています。医療行為が必要となる場面に限らず、メンタルの部分もケアできる看護師や保健師などの存在はますます重要になってくるでしょう。緊急被ばく医療の場面でも、看護の視点で現場をマネジメントできる看護職が必要。これからは被ばく医療の定義が変わってくるのではないでしょうか」と野戸教授。本プロジェクトで高度実践看護教育部門のリーダーを務める西沢義子教授は「被ばく医療で特色ある教育を実施しているのは、弘前大学・長崎大学・鹿児島大学しかありません。これらの大学が力を合わせてここまでやってきた感があります。ニーズは非常に大きいにもかかわらず、全国的にもスタッフ不足でがん治療における放射線看護教育でさえままならない状況だからこそ、北海道を含め東日本で唯一の放射線看護教育を担っている弘前大学が、国内外の関係機関と連携協力しながら強い使命感を持って進めていかなければなりません」と決意を語ります。

弘前大学大学院 保健学研究科
健康支援科学領域 健康増進科学分野 教授
西沢 義子（にしざわ よしこ）

弘前大学教育学部特別教科（看護）教員養成課程卒業。弘前大学医学部附属病院看護婦を経て、弘前大学養護教諭養成所助手。弘前大学教育学部助手・助教授、弘前大学医学部助教授・教授を経て、平成19年4月から弘前大学大学院保健学研究科教授。平成14年3月、医学博士（弘前大学）取得。「高度実践被ばく医療人材育成プロジェクト」高度実践看護教育部門リーダー。

弘前大学大学院 保健学研究科
健康支援科学領域 障害保健学分野 教授
野戸 結花（のと ゆか）

弘前大学教育学部特別教科（看護）教員養成課程卒業。弘前大学医学部附属病院看護婦を経て、弘前大学医療技術短期大学部助手。山形大学医学系研究科看護学専攻修士課程修了後、弘前大学医学部保健学科講師。弘前大学大学院医学研究科博士課程修了後、弘前大学大学院保健学研究科准教授を経て、弘前大学大学院保健学研究科教授。平成18年3月、医学博士（弘前大学）取得。「高度実践被ばく医療人材育成プロジェクト」高度実践看護教育部門サブリーダー。

学生たちで賑わうアクティブ・ラーニング・エリア

44年振りのリニューアルオープン

「弘前大学附属図書館」

昨年10月1日、老朽化していた旧附属図書館本館が昭和45年以来、実に半世紀近くを経た44年振りの改修を終え、弘前大学の文京キャンパスに新しい歴史を刻み始めました。果たしてどこが変わってどこが変わらなかったのか、新しい試みと目指すべき姿は。弘前大学附属図書館長の郡千寿子教授にお聞きします。

予期せぬ本との出会いこそ図書館の魅力

本離れ活字離れが進む昨今、本が読みたいとなればインターネットでいくらでも電子書籍が手に入る時代。「今はネットでお目当ての書籍がピンポイントで購入できて本当に便利です。しかしこうした環境下では自分の想定内の世界しか見ることができません。実際に図書館に足を運んで自分の目や感覚を頼りに、ずらっと並んだ本の背表紙を眺めながら散策するうちに、期せずして興味深い本や資料に出会い、新たな発想を生むきっかけを掴むことができるかもしれません。また、それまで話す機会のなかった分野の友人たちと出会い、意見交換のチャンスが得られるかもしれない。これこそが図書館の魅力と言えないでしょうか」と自身の経験に重ねて図書館への思いを語るのは、昨年4月の就任でリニューアル後初の附属図書館長を務める郡千寿子教授です。

昭和45年に建てられた旧図書館本館は老朽化が進み、入り口が2階に設けられていたこともあって、特に冬場など利用者は何かと不便を強いられてきました。建物自体の耐震工事はもちろん、古い書架の歪みや電動式集密書架の不具合などで、これ以上の書籍収蔵も限界に近い状態でした。図書館は現在、本館だけで約67万冊の蔵書を保有。製本されていない雑誌類は含まれていないので、実際はもっと多い冊数を収蔵していることになりますが、メンテナンスフリーの手動式集密書架を新設したことで一気に10万冊の収蔵スペースを確保、全体の収蔵数は62万冊から72万冊に増えました。また一般の学生の入室には許可が必要だった第1・第2・集密書庫の閲覧が全て自由になったことで、必要な本を自分で探せるようになりました。実は和洋図書を収蔵する第1書庫ですが、構造上の理由で旧図書館当時の姿をそのまま残しています。3階建ての中にある5階建て書庫、階段を昇り降りしながら移動する昔ながらの書庫は、タイムスリップしたかのような不思議な空間となっています。

学生たちで賑わうラーニングコモンズ

こうして古き良き旧国立大学図書館の風情を残していた旧図書館は、約11カ月の改修工事を終え時代に相応しい明るくオープンな新図書館として、新たな足跡を刻み出しました。一番に目を引くのは大学正門からでも確認できる大きなサイン「Hirosaki University Library」。館内は全面バリアフリー、サービス機能が集約された1階サービスカウンター、その奥の開放的な閲覧室には間仕切りとして地元・弘前の工芸品「こぎん刺し」のデスクトップパネルと「ブナコ」のペンダントライトが、お洒落で和やかな雰囲気を演出しています。

最も変わったのが、学生たちの共有学習スペースとして利用できる2階のラーニングコモンズ。1階とは趣を変え落ち着いて本と向き合える閲覧室の反対側には、ガラ

書庫にも自由に入れるようになった

弘前の工芸品「こぎん刺し」や青森ブナを使った「ブナコ」のライトがお洒落な閲覧室

手動式集密書架の設置で新たな収蔵スペースを確保

新しくなった明るいエントランス

飲み物の持ち込みができる「オープンラウンジ」

スで仕切られたエリアがあります。ここは学生たちが自由に集まり仲間同士でディスカッションを交わせる「アクティブ・ラーニング・エリア」で、空き時間に利用する学生たちでいつも賑わっています。隣接する「オープンラウンジ」と戸外の「オープンテラス」は休憩エリアとして使え、ペットボトルなどの持ち込みが許されています。さらに一番奥の「グループ・ラーニング・ルーム」は、予約制でゼミなど多目的に利用できる独立スペースです。3階は改修前と大きく変えず、「PCサテライト」「アクティブ・ラーニング・エリア」「グループ・ラーニング・ルーム」と事務室などによって構成されています。

地域に開かれた“知の交錯する場所”へ

今後の大学図書館は、「学術情報や知識の集積場所」という従来の役目に加え、新たに「地域に開かれた知の交錯する場所」としての使命を担っていきます。具体的には学生たちの教育・研究支援を第一義に、資料や情報のデジタル化によって利便性を高めながら、図書館が主体となって市民や中高生に向けて開催する講演会、また「太宰治自筆ノート」など所蔵する貴重資料の公開などを視野に入れた企画なども進めていく予定です。また、社会や地域との連携もこれから取り組むべき課題のひとつです。海外では大学や附属図書館は広く開かれた場所ですが、日本では敷居が高いと敬遠されがち。しかし弘前大学には多分野の教員が在籍していることから、研究書籍も実に多様で専門性に富んでいます。こうしたアカデミックな雰囲気のなかで、“知的欲求を満たす場”“地域に開かれた場”としての役割が大いに期待されるところです。

「これからどういう図書館を目指すのでしょう」との問いに、郡館長は「私にとっての図書館は、探検する場所であり思索する場所であり癒される場所」と話し、「全国にある大学の図書館は、蔵書にしても雰囲気にしても個性や姿勢が凝縮されそれぞれに違う空気が流れています。これから学生や教職員が自分たちの図書館だという意識を主体的に持つことで、弘前大学らしさが出てくるのだと思っています。そういった意味でも今回のリニューアルは再構築のチャンス。これを機にできるだけ多くの人に足を運んでいただき、新しい図書館を利用者の皆さんと作り上げていけたら。これからどんな図書館になっていくのか私自身も楽しみです」とメッセージを託します。

太宰治自筆ノートなど貴重な資料も保管される

弘前大学 附属図書館長・教育学部教授
郡　千寿子（こおり ちずこ）

武庫川女子大学大学院国語国文学専攻課程修了後、同大助手、神戸学院大学、大阪学院大学、京都女子大学など非常勤講師を経て、平成11年4月より弘前大学教育学部助教授。平成22年より弘前大学教育学部教授。平成24～26年まで弘前大学出版会編集長。平成26年4月より弘前大学附属図書館館長。専門分野は日本語学。博士（文学）。全国大学国語国文学会常任委員。放送大学客員教授。編著書に『真字本方丈記』『国語語彙史の研究』『寺山修司という疑問符』など多数。

弘前大学附属図書館（本館）
開館時間　授業期　月～金　9:00～22:00　土・日 10:00～17:00
　　休業期　月～金　9:00～17:00　土・日 休館
（問）TEL.0172-39-3162
ホームページ　http://www.ul.hirosaki-u.ac.jp/

学内トピックス

話題の広場から

ダイドードリンコ株式会社との共同研究開始で合意

本学とダイドードリンコ株式会社は、機能性素材である「プロテオグリカン」（PG）の価値を多くの方々に知っていただくとともにその更なる可能性を研究することを目的として、共同研究を行うこととなり、8月6日（水）に共同記者会見を開催しました。

当日は、本学から柏倉研究担当理事、大学院医学研究科の中根教授、ダイドードリンコからは長谷川ヘルスケア事業部長が出席し、会見を行いました。

会見において、本学からは、1998年に“氷頭なます”をヒントに、酢酸を使ったサケ鼻軟骨からのPG抽出の研究を始めたこと、その後、地元企業との共同研究により量産化に成功し、数多くの健康食品や化粧品が開発販売され、研究成果としてPGが広く認知されることとなったこと、そして2013年には文部科学省の補助事業「地域イノベーション戦略支援プログラム」に採択されるなど、機能性素材としての可能性を大いに期待されていることが説明されました。

また、ダイドードリンコからは、地域との共存共栄を基本理念に、これまで青森県や本学、地元企業など多くの関係者の協力によりPG活用商品を開発し、2013年末に発売を開始して好評を得ていること、さらに、新たに同素材を活用した美容系の健康食品を発売することとなったこと、加えて、今回の共同研究では主に「抗酸化・アンチエイジング」、「免疫調節作用（抗アレルギー）」、「抗肥満作用」の3つのテーマを予定しており、将来的には新商品の開発や特許申請等へと展開し、PGの魅力をさらに高めていきたいと考えていること、8月25日には美容ゼリーなどを発売すること等が説明されました。

握手する長谷川事業部長（右）、柏倉理事（中央）、中根教授（左）

文部科学省大学等シーズ・ニーズ創出強化支援事業による第二回対話型ワークショップを開催

8月25日（月）、弘前市土手町の土手町コミュニティパークにおいて、第2回対話型ワークショップを開催しました。これは本学が平成25年度に採択された文部科学省の「革新的イノベーション創出プログラム（COI STREAM）」の事業の一環として、昨年度の第1回に引き続き実施したものです。

今回は『さあ皆で健康の未来を考えよう～ヒトはみんなクリエイティブだ！』をテーマに掲げ、大学関係者のみならず、企業や行政、健康に関心のある一般市民など、約50名が参加しました。

当日は、COIプログラムの研究リーダーである中路重之大学院医学研究科長の挨拶の後、健康を大事と考えて行動できる人（＝健康寿命人）になってもらうために、私たちができること、したいことについて、それぞれグループに分かれてアイデアを出し合いました。特に、デザイン思考による想像力を高める各種ツールを活用して、健康長寿を目指す未来シナリオを、発表・上演するなど、「笑い」と「感動」にあふれた、非常に有意義なワークショップとなりました。

今後も本拠点では継続的にワークショップを開催し、COIプログラムの社会実装を見据えた、新たなシーズ・ニーズの発掘に向けた活動を展開していきます。

議論する参加者

2014年度弘前大学シニアサマーカレッジを実施

2014年度弘前大学シニアサマーカレッジが、9月7日（日）から9月10日（水）までの4日間にわたり実施されました。本カレッジは、平成18年度から連続して開講しており、今年度で第9回目となります。

今年度は、「津軽ふるさと学紀行－弘大最前線－」をテーマに、世界自然遺産の白神山地や日本一の桜と謳われる弘前公園をフィールドとして、弘前や津軽の歴史、文学、風土と本学が持つ学術的情報や設備等をミックスさせた講義を中心に、2つのコースを開催しました。

初日には、開講に先立つ入学式において主催者側から佐藤学長及び共同主催の公益社団法人弘前観光コンベンション協会の三上千春常務理事の挨拶の後、後援側である弘前市の高木伸剛観光振興部長から御挨拶をいただきました。

また、同日は講義の後にウェルカムパーティーを行い、佐藤学長をはじめ本カレッジ講師の方々、スタッフらと受講生が親睦を深めました。

本カレッジには、2コース合わせて青森県以外から延べ12名、県内から同24名の計36名の受講生が集まり、青森県の自然や歴史、文化に触れ、心身をリフレッシュしていました。

本学では、来年度もシニアサマーカレッジを開講する予定です。

白神トレッキングの様子

「弘前大学高大連携公開講座修了証書授与式」を実施

平成２６年度前期「高大連携公開講座修了証書授与式」を９月１９日（金）、弘前大学総合教育棟の共用会議室で実施しました。

今回の授与者は、青森県立弘前南高等学校から２名、青森県立弘前中央高等学校から２名、弘前学院聖愛高等学校から１名、東奥義塾高等学校から２名の計７名でした。授与式には、伊藤理事（教育担当）並びに当該高等学校長等が出席し、伊藤理事から一人ひとりに修了証書が手渡されました。

これを受けて、受講生を代表して青森県立弘前中央高等学校の下山宝楽さんから挨拶があり、授与式は終了しました。

伊藤理事から修了証書を授与される受講者

伊藤理事（前列左から3人目）と修了学生

COI特別講演会を開催

９月２４日（水）、１０月２０日（月）及び１１月１１日（火）にCOI特別講演会を実施しました。これは本学が平成２５年度に文部科学省の「革新的イノベーション創出プログラム（COI STREAM）」※に採択され、本学と企業及び自治体等で組織する「脳科学研究とビッグデータ解析の融合による画期的な疾患予兆発見の仕組み構築と予防法の開発（略称：革新的「健やか力」創造拠点）」をテーマとした研究拠点の活動を推進するにあたり、他拠点の取り組みを学び、COI拠点間の連携や更なる知見を深めることを目的として、本講演会を開催しております。

本講演会は一般市民の方も対象としており、どなたにでも興味を持っていただける内容です。今後もこのような講演会を継続的に開催すると共に、本拠点と全国のCOI拠点との連携を強化しながら、COI事業を展開していきます。

※「革新的イノベーション創出プログラム（COI STREAM）」…現在潜在している将来社会のニーズから導き出されるあるべき社会の姿、暮らしのあり方（以下、「ビジョン」という。）を設定し、このビジョンを基に10年後を見通した革新的な研究開発課題を特定した上で、既存分野・組織の壁を取り払い、基礎研究段階から実用化を目指した産学連携による研究開発を支援するプログラム。平成25年度は全国12拠点が採択。

［第４回特別講演会］

日時：平成26年9月24日（水）13:30～15:00

講師： 東京大学COI研究推進機構長／三菱化学テクノリサーチ 特別顧問
池浦 富久氏

東京大学COI研究推進機構副機構長（商品開発・事業化戦略担当）
テルモ株式会社　理事
野尻 知里氏

演題：東京大学のCOI戦略～若者と共存共栄する持続可能な健康長寿社会の実現～

［第５回特別講演会］

日時：平成26年10月20日（月）15:00～16:30

講師： GEヘルスケア・ジャパン株式会社　執行役員　技術本部長
星野 和哉氏

演題：GEのイノベーションと日本の役割

［第６回特別講演会］

日時：平成26年11月11日（火）13:30～15:00

講師： 川崎市産業振興財団
Center of Open Innovation Network for Smart Health（COINS）
プロジェクト統括／東京大学大学院薬学系研究科・特任教授
木村 廣道氏

演題：地域発オープンイノベーションの基盤作りに向けて

［参考］弘前大学COI研究推進機構ホームページhttp://coi.hirosaki-u.ac.jp/web/

東京大学　池浦富久氏

東京大学　野尻知里氏

GEヘルスケア・ジャパン㈱星野和哉氏

COINS木村廣道氏

学内トピックス

話題の広場から

平成26年度弘前大学及び弘前大学大学院秋季学位記授与式

平成２６年度弘前大学及び弘前大学大学院秋季学位記授与式が9月30日(火)、事務局3階大会議室において行われ、佐藤学長から各学部及び各研究科それぞれの代表学生に学位記が授与されました。

佐藤学長から学位記を授与される卒業生

平成26年度弘前大学及び弘前大学大学院秋季入学式

平成２６年度弘前大学及び弘前大学大学院秋季入学式が１０月１日(水)、事務局3階大会議室にて、関係者出席の下、厳かに行われました。

秋季入学式の様子

附属図書館リニューアルオープンセレモニーを挙行

本学は、１０月１日(水)に弘前大学附属図書館リニューアルオープンセレモニーを学内外約５０名の出席のもと挙行しました。

弘前大学創立５０周年記念会館２階岩木ホールで行われたセレモニーでは、佐藤学長の挨拶に続き、郡附属図書館長による挨拶及び概要説明、鈴木敏之文部科学省研究振興局参事官(情報担当)による祝辞がありました。その後は附属図書館１階利用者入口エントランス前に移動し、関係者によるテープカットが行われ、リニューアルオープンを祝いました。

また、引き続き行われた図書館内覧会では、新設された各施設を中心に、館長はじめ図書館職員が改修前と対比しながら説明しました。

今回の改修により、利用者入口を２階北側外階段から１階東側に変更、多様な学習環境を提供するために取り組んできた「学びの場」としての「ラーニングコモンズ」の拡充、資料収蔵能力の向上となる手動式集密書架の設置、バリアフリー化により車椅子等利用導線の改善となるエレベーターの設置や多目的トイレなどが整備されました。

今後は学術情報の集積という従来の役目に加え、地域に開かれた知の交錯する場所という機能が重要になってきます。図書館で知識の交流が生まれ、利用が広がることが期待されます。

テープカットの様子(左から加藤理事・副学長、佐藤学長、鈴木参事官、郡館長)

内覧会の様子(地元伝統工芸のこぎん刺しパネルやブナコランプを配置した閲覧室)

在札幌米国総領事館首席領事が本学を訪問

在札幌米国総領事館のジョエレン・ゴーグ首席領事が、11月6日(木)、本学を訪問しました。ジョエレン・ゴーグ氏は、高校時代に国際ロータリーの交換留学生として青森県に滞在しており、JET プログラム(The Japan Exchange and Teaching Program: 語学指導等を行う外国青年招致事業)にて再び来日した際も本県で数年間を過ごすなど、青森県との深い親交があります。

和氣副学長を表敬訪問した後、イングリッシュ・ラウンジを訪れたゴーグ氏は、英語学習のために集まっていた学生達と懇談し、大学生活の様子や今後の夢を質問するなど、これからもグローバルに活躍してほしいと学生達を激励しました。

弘前大学資料館を見学した後、農学生命科学部附属生物共生教育研究センター(藤崎農場)を訪れ、収穫の時期を迎えたりんご収穫体験を行いました。本学で開発された品種「こうこう」は、果皮が黄色で果肉が白い晩生品種で、たっぷり蜜の入った果実を収穫するというめったに出来ない貴重な体験を楽しみ、今後もアメリカとの友好関係が継続・発展することを期待して大学を後にしました。

和氣副学長を表敬訪問

イングリッシュ・ラウンジで学生と懇談

第14回弘前大学総合文化祭「テーマ『BEAT』」

第14回弘前大学総合文化祭が10月24日（金）から26日（日）の3日間にわたり、本学文京町キャンパスで開催されました。

今年のテーマは「BEAT」です。これには、弘大祭実行委員会の「ビートを刻んで1つの音楽を作り上げていくように弘前大学の学生や教職員といった学校の関係者だけではなく、地域の住民の方々とも手を取り合い、一丸となってより良い弘大祭を共に作り上げていきたい」との想いが込められています。

オープニングフェスティバルでは、爽やかな秋空の下、集まった大勢の観客を前に、総合文化祭実施委員会委員長の佐藤学長が声高らかに開祭宣言し、華々しい幕開けとなりました。

期間中は、学生主体の模擬店でキャンパスは賑わい、学生の日頃の研究成果をもとにした実習や実験を直接体験できる「サイエンスへの招待」をはじめとし、様々な研究発表がありました。さらに大学会館広場ステージでは、「ミスター＆ミス弘大コンテスト2014」や「爆笑お笑いライブin HIRODAI」、「激闘！カラオケ選手権！」などが開催され、会場は大きな拍手と笑いに包まれました。

また、教職員の芸術作品を展示した「職員芸術・造形作品展」や県内各地から計8チームが集合し、華麗な演舞を披露した「よさこい弘大」といったイベントの他に、一般来場者が参加できる「Let's BINGO!」や「大抽選会」など多彩な催しも行われました。

昨年同様、包括協定を締結している弘前市により行われた「地元産農産物等販売」にも多くの来場者が訪れていました。

本学後援会からの助成によるキャンパス内外を彩る幟、提灯も掲げられ、お祭りムードを盛り上げていました。

学生、教職員、地域住民が一体となり本学の更なる飛躍が感じられる3日間となりました。

【全学イベント】

Opening Festival　職員芸術・造形作品展　よさこい弘大　Final Festival　花火

【学術文化祭】

■人文学部
- 特別展「東北の弥生化 ―縄文時代が変わるとき―」
- 成田コレクション・アイヌ資料の特別公開
- 地域未来創生センター活動成果公開

■医学研究科
- 最新の医学について（社会医学・整形外科学）

■医学部附属病院
- 市民公開講座「肝癌の治療について ―外科医、内科医、放射線科医の立場から」

■保健学研究科
- 市民公開講座「がんの放射線治療」
- 人体の構造 ～線描図と写真による解剖記録～

■農学生命科学部
- 公開講座「岩木川の水環境を学ぶ」

■北日本新エネルギー研究所
- 新エネと食料と青森と私

【弘大祭オフィシャルイベント】

熱くなれよ!パフォーマンスショー
激闘!カラオケ選手権
弘大band stage ―2014―
大抽選会
弘前大学ドッジボール大会2014
二人でなろうよ、グルメ王
爆笑お笑いライブ in HIRODAI
ミスター&ミス弘大コンテスト
スタンプラリー2014
M―1グランプリ
Let's BINGO!
弘大!秋の部活・サークル対抗戦
燃えろ!!○×クイズ!!
熱タッ♡ソフトボール大会2014
着ぐるみとお友達になろう♪

【学部祭】

人文祭　教育祭　医学祭　理工祭　収穫祭

佐藤学長による開祭宣言

弘前大学YOSAKOIサークル「焔舞陣」による華麗な演舞

各サークル等団体による出店

ミスター&ミス弘大コンテスト2014

激闘!カラオケ選手権

学内トピックス

話題の広場から

平成26年度「第67回東奥賞」受賞

本学は、プロテオグリカン（PG）に関して、従来の技術に比して安価で大量に抽出する世界初の技術を確立したことにより、各種製品への展開の道筋をつけ、地域経済の活性化につながる貢献をしたことが評価され、事業を連携して実施してきた株式会社角弘、地方独立行政法人青森県産業技術センターとともに、「第６７回東奥賞」を受賞することとなりました。

「東奥賞」は、東奥日報社が、昭和２３年に創刊６０周年記念事業として、青森県内の産業、学術、文化、スポーツ、社会福祉などの各分野で活躍し、郷土の発展に多大な貢献をされた個人や団体を表彰するため、創設したものです。

１２月６日（土）、青森国際ホテル（青森市）において行われた贈呈式では、佐藤学長が受賞者として登壇し、東奥日報社の塩越社長から賞状とメダルの授与を受け、その後、三村青森県知事及び、青森県プロテオグリカンブランド推進協議会会長で株式会社カネショウの代表取締役社長の櫛引利貞氏からご祝辞をいただきました。

引き続き、佐藤学長からは、受賞に対する御礼とともに、「PGだけではなく自然科学の成果は時代とともに古くなっていくものですが、関係する皆様のご協力により、埋もれることなく大きな成果へつながりました」とする謝辞と、今後も科学的成果を以て地域に貢献していきたい、との受賞の言葉がありました。

東奥日報社塩越社長から表彰状を受け取る佐藤学長

推薦入試Ⅰ合格者の入学前交流プログラムを実施

１２月１２日（金）、弘前大学創立５０周年記念会館において「推薦入試Ⅰ合格者の入学前交流プログラム」が、人文学部、理工学部、農学生命科学部の３学部の合格者（生徒・保護者）総計１５１人の参加を得て開催されました。

このプログラムは、推薦入試Ⅰ合格者及びその保護者を対象に、入学前に教員や学生と触れ合う機会を設けることによって大学生活等への不安をやわらげ、入学前学習の動機付けに繋げることを目的として行うものです。

当日は、伊藤成治副学長兼教育担当理事の挨拶の後、第1部（全体ガイダンス）、第2部（学部別ガイダンス）、第3部（教員との交流会）を行いました。全体ガイダンスでは大学生活全体のアドバイスや経済支援などについて、学部別ガイダンスでは、教育課程等の概要や入学までの学習指導、校内見学、先輩との交流、就職に関する説明等を行いました。

最後に、教員等との交流会では、各学部教職員、先輩学生、プログラム参加者による交流を行い、最初は緊張の面持ちだった参加者も次第に打ち解けあい情報交換するなど楽しい一時となりました。

また、交流会終了後、希望者を対象に「学生寮の見学」も行いました。

参加者からは、「情報が得られて安心した」、「役に立った」、「入学まで何を勉強しておけばよいかがわかった」等の声が寄せられました。

学部別ガイダンスの様子

深浦町におけるサーモン養殖実証事業に関する三者連携協定を締結

弘前大学食料科学研究所は、深浦町と株式会社オカムラ食品工業の間で、相互の発展に資するため三者が包括的な連携のもと、深浦町におけるサーモン養殖の可能性調査及び新産業創出等の分野において相互に連携・協力する協定を12月15日（月）に締結しました。

ホテル青森で行われた協定書調印式には、深浦町から吉田町長、菊池副町長、坂本教育長が、株式会社岡村食品工業から岡村代表取締役社長、岡村相談役、岡村顧問が、本学から佐藤学長、大河原社会連携担当理事・副学長、羽田副理事、嵯峨食料科学研究所長、福田准教授が出席し、吉田町長、岡村代表取締役社長及び嵯峨食料科学研究所長が協定を締結しました。

調印にあたって、吉田町長からは、「深浦町における第一次産業の振興と雇用の創出へ向け、本協定の締結を契機に、衰退している水産業を持続的な産業と繋げ、地域創成の動きを強めたい。」と、岡村代表取締役社長からは、「生食サーモンの需要は世界的に拡大しており、国内での供給が必要であると感じていたが、立地条件の面から深浦町では大規模養殖事業の展開が可能であり、また、本事業を通じて青森県及び深浦町の活性化に貢献したい。」と、嵯峨食料科学研究所長からは、「基礎・応用的学術面から本事業を展開し、地方からの国際貢献へと繋げたい。」とそれぞれ挨拶がありました。

本連携協定の取り組みでは、10年後をめどにサーモン養殖の年間出荷量を1万トン、販売額120億円の産業創出を目指しており、地域から大きな期待が寄せられています。

締結式の様子

弘前大学・弘前市「国際交流会」開催

本学では、弘前市在住の留学生と弘前市関係者がふれあい、相互理解を深めるため、12月25日（木）、弘前大学創立50周年記念会館において「国際交流会」を開催しました。

本学では、学都・弘前に存立する国立大学法人として、これまで弘前市より国際交流に関する多くの支援を受けてきました。「弘前市私費留学生就学援助事業」、「留学生パスポートひろさき事業」等、本学の留学生は、これらの制度を活用し、市民との交流も深めながら、実り多い留学生活を送っています。

初めて開催された「国際交流会」では、佐藤学長、葛西弘前市長、大河原理事の挨拶の後、弘前市の援助事業を受けている留学生3名から、弘前市への感謝及び充実した大学生活の様子が語られました。

また、弘前大学北日本新エネルギー研究所の村岡所長及び所属学生から「学生市民協働プログラム」の実施報告があり、本学と弘前市の協力体制を深めていくことの重要性が発表されました。

交流会の参加者は約130名の盛会となり、弘前市の企業関係者も多数参加した会場では、本学に在籍する留学生との交流を楽しんでいました。

留学生による発表の様子

「太宰治 修身ノート」デジタル版を公開

弘前大学附属図書館は、同館が所蔵する貴重資料「太宰治　修身ノート」のデジタル版を1月9日（金）、同館ホームページで公開しました。

貴重資料のデジタル公開は「津軽領元禄国絵図写」「阿仁鉱山関係絵図」「太宰治英語ノート」に続く第4弾で、今回の公開により太宰治の自筆ノート2冊のデジタル版が揃ったことになります。

自筆ノートは、1927年に旧制弘前高校時代に入学した太宰が、第1年次の「英語」と第2年次の「修身」の講義を書き留めた大学ノートで、2009年に著名な郷土文学研究家小野正文氏のご子息から寄贈されました。原本は痛みが激しいため、自筆ノートを多くの人に見てもらいたいと2013年、複製本を弘前大学出版会から刊行し、その後、デジタル版公開に至っています。

「修身」ノートには、「英語」ノート同様、表紙、裏表紙、表見返し、裏見返しに太宰の落書きがあり、なかには自画像とおぼしき人物画が認められます。デジタル版は拡大して筆跡の細部まで見ることができます（URLは下記参照）。自筆ノートの翻刻は「弘前大学学術情報リポジトリ」で公開しています。

※URL:http://www.ul.hirosaki-u.ac.jp/

太宰の落書きを見ることができる修身ノート

平成26年度弘前大学COIイノベーション・サミットを開催

1月30日（金）、ナクアシティ弘前において「弘前大学COIイノベーション・サミット～真の社会イノベーションを実現する“革新的『健やか力』創造拠点”の形成に向けて～」を開催しました。

本サミットは、文部科学省の「革新的イノベーション創出プログラム(COI STREAM)」に採択された、本学と企業及び自治体等で組織する「脳科学研究とビッグデータ解析の融合による画期的な疾患予兆発見の仕組み構築と予防法の開発（略称：革新的「健やか力」創造拠点）」をテーマとした研究拠点の活動を推進するにあたり、産学官金の関係者が一同に会し、これまでの研究成果の発表や新たな産業創出のあり方などについて討論する場として開催しました。

当日は、一般市民も含め、約450名が参加する中、佐藤学長、青森県三村申吾知事、弘前市葛西憲之市長の開会挨拶から始まり、文部科学省土屋定之文部科学審議官、（独）科学技術振興機構齊藤仁志執行役に御挨拶を賜り、本学COI研究推進機構中路重之副機構長（研究リーダー）からこれまでのCOI研究の成果を発表しました。

その後、COI STREAMガバニング委員会小宮山宏委員長（東京大学前総長）、COI STREAMビジョン1　松田譲ビジョナリーリーダー（協和発酵キリン前社長）、GEヘルスケアジャパン株式会社 川上潤社長兼CEO、京都府立医科大学COI-T 奥村太作プロジェクトリーダー、九州大学大学院医学研究院環境医学分野 清原裕教授から御講演いただきました。

また、パネルディスカッションにおいては、日経BP社 宮田満特命編集委員がモデレータとなり、上記の講演者にCOI STREAM構造化チーム 水野正明COI研究アドバイザー（名古屋大学医学部附属病院・教授）、東京大学 松島克守名誉教授（（一社）俯瞰工学研究所代表）が加わり、弘前大学COI拠点への期待や今後目指すべき成果について、活発な議論が交わされました。

加えて、土屋定之文部科学審議官が本学大学院医学研究科及び医学部附属病院など、当COI拠点に関する設備を視察されました。

今後も本拠点では研究成果を継続的に報告するとともに、社会実装へ向けた取り組みを全県一致で続けてまいります。

パネルディスカッションの様子

学内トピックス

話題の広場から

平成26年度弘前大学学生表彰採択一覧

【団　体】

課外活動で特に顕著な功績があった学生等

医学部競技スキー部	・第56回東日本医科学生総合体育大会スキー競技　女子総合優勝
医学部自転車競技部	・第57回東日本医科学生総合体育大会自転車競技　チームタイムトライアル準優勝
医学部陸上競技部	・第57回東日本医科学生総合体育大会陸上競技　女子フィールド総合優勝
医学部バトミントン部	・第4回北日本保健学系学生バドミントン選手権大会　男子団体優勝、女子団体優勝

【個　人】

研究活動で特に顕著な成果を挙げた学生等

佐々木　花恵 医学部医学科３年	・平成26年4月24日～4月26日、広島にて開催された第103回日本病理学会総会において、「早期胃癌におけるリンパ管・血管の局在解析」に関する研究発表を行い、「優秀発表賞並びに発表賞」を受賞した。
千葉　大輔 医学研究科３年	・弘前市岩木町の住民を対象とした岩木健康増進プロジェクトにおいて、変形性膝関節症に関する疫学調査の研究データ(変形性膝関節症の骨棘と血清ペントシジン及びサイトカインの関連)を第42回日本関節病学会で発表し、優れた発表内容の研究に贈られる「学術集会奨励賞」を受賞した。
菊池　大貴 理工学研究科 博士前期課程１年	・平成26年11月10日～14日に東京大学にて開催された国際会議「JGRG24」において「Relativistic Sagmac effect by CS gravity」に関する研究発表を行い、「JGRG Presentation Award(Poster)」を受賞した。
及川　祐梨 理工学研究科 博士前期課程２年	・理工学部4年次における卒業研究、さらに同大学院博士前期課程を通して含フッ素オリゴマー/無機ナノコンポジット類の開発とその機能解明に関する研究を積極的に、かつ自主的に展開させてきている。その間における特に顕著な研究成果として、全国規模レベルで開催された、2014年色材研究発表会において「フルオロアルキル基含有ビニルトリメトキシシランオリゴマー/炭酸マグネシウムナノコンポジットの調製と焼成プロセスにおけるフッ化マグネシウムの生成」に関する口頭発表を行い、“優秀講演賞”を受賞した。 また、当該学生は自ら行っている研究の総説を執筆しており、種々の分野からそれぞれ高い評価を得ている。

斎藤　輝明 農学生命科学研究科２年	・食用キノコ「ムキタケ(Sarcomyxa serotina)」には2種類のキノコが混在していることを発見して、両者の学名と和名を整理し、「ムキタケ(Sarcomyxa edulis)」と「オソムキタケ(Sarcomyxa serotina)」の2種に類別した。 これらの結果は、日本菌学会会報(Vol.55: 19-28.2014)に本人を筆頭著者として発表され、東奥日報・陸奥新報・河北新報の三紙に報道された。 本学生の業績は、今後国内外で出版されるキノコ図鑑などに反映される顕著な成果である。
加藤　大智 農学生命科学研究科２年	・平成26年8月10日～15日にドイツのポツダム市で開催された第8回国際双翅目研究学会(8th International Congress of Dipterology)において「日本産キマダラヒメガガンボ属の分類学的研究」に関する発表を行い、学生ポスター賞の第2席を受賞した。

課外活動で特に顕著な功績があった学生等

髙橋　麻里奈 教育学部１年	・第65回東北地区大学総合体育大会　円盤投優勝
矢口　頌 教育学部２年	・第65回東北地区大学総合体育大会3000m障害走優勝
山形　真由佳 教育学部３年	・第67回東北学生陸上競技対校選手権大会ハンマー投優勝 第43回東北学生陸上競技選手権大会ハンマー投優勝
木村　綾花 教育学部４年	・第36回北日本学生陸上競技対校選手権大会走幅跳優勝
大久保　玲美 医学部保健学科２年	・第67回東北学生陸上競技対校選手権大会10000m競歩優勝
有益　宏樹 理工学部２年	・第43回東北学生陸上競技選手権大会10000m競歩優勝
舘坂　将矢 教育学部１年	・東北学生柔道体重別選手権大会 60kg級　優勝 全日本ジュニア柔道体重別選手権東北予選会 60kg級　優勝
板矢　一希 医学部保健学科２年	・第4回北日本保健学系学生バドミントン選手権大会　男子シングルス優勝
工藤　甚子 医学部医学科１年	・第57回東日本医科学生総合体育大会自転車競技女子個人タイムトライアル準優勝
光岡　明日香 医学部医学科１年	・第57回東日本医科学生総合体育大会陸上競技　女子走幅跳準優勝
伊藤　真子 医学部医学科３年	・第57回東日本医科学生総合体育大会陸上競技　女子砲丸投準優勝
濱谷　智子 医学部医学科３年	・第56回東日本医科学生総合体育大会スキー競技　女子複合第二位
高橋　茜 医学部医学科３年	・第56回東日本医科学生総合体育大会スキー競技　スーパー大回転女子並びに女子回転双方準優勝
宇佐美　真太郎 医学部医学科４年	・第56回東日本医科学生総合体育大会スキー競技　男子回転優勝
舘田　優 教育学研究科2年	・国際的規模の公募展「AOMORI PRINTトリエンナーレ」においてタイトル「二重肖像」を出品し入賞した。当該、展覧会は革新的現代アートの創造を目指す主旨の元、国内外に呼びかけ国際版画トリエンナーレ公募展として企画されたものである。 大賞に次ぐ部門賞5点のうちの「みちのく銀行賞」の栄冠を勝ち取った。

野田村収穫祭で遊具スペースを運営

チーム・オール弘前がつなぐ地域と学生の絆

「弘前大学ボランティアセンター」

甚大な被害に見舞われた東日本大震災。「弘前大学として支援できることはないか」という教員の呼びかけがきっかけとなり「弘前大学ボランティアセンター（HUVC）」は立ち上がりました。発足2年目の2012年には全学組織となり、学部、大学の垣根を越えて多くの学生、市民がボランティア活動に参加しています。野田村復興支援プロジェクトを主体に、ますます活動の場を広げるHUVCの歩みと今後の展望をご紹介します。

「学生」というマンパワーを持つ支援の母体へ

2011年3月11日。翌日に後期日程試験を控えた大学内は、準備に追われる職員と下見をする受験生で慌ただしい雰囲気でした。突然の大きな揺れと停電、つながらない携帯電話に学部内はもとより、大学周辺は騒然。まずは教員有志で受験生の宿泊先の確保や滞在費の援助、空いている学生寮の提供などを行いました。その後、日に日に明らかになる被災地の現状を目の当たりにするにつれ、被災学生のケアにとどまらず、弘前大学としてできることはないか、という思いが募るようになりました。震災から約2週間後、過去に阪神・淡路大震災を経験した教員仲間の呼びかけにより、略式ながら「弘前大学人文学部ボランティアセンター」が立ち上がりました。すぐに学生に呼びかけると、あっという間に50名を超える学生たちが登録。学生のマンパワーを実感したといいます。

支援の地に野田村を選んだ理由は、中央からの支援が届きにくいこと、弘前市から比較的近い八戸や、久慈の被害が小さく、すでに地元の社会福祉協議会が主体となって支援を始めていたことにあります。先遣隊が野田村を訪れたとき、その被害の大きさにだれもがここから支援を始めるべきと確信。野田村から帰ったその足で、被災地の現状を弘前市長に報告をします。「官公庁や市民団体、大学を含めたチーム・オール弘前として支援をしよう」という市長の言葉がきっかけとなり、官民学による野田村復興支援プロジェクトがスタートしました。

官民学のパワーを集結「チーム・オール弘前」始動!

プロジェクトを始動させる際、もっとも配慮したのはボランティアに参加する学生たちの安全です。移動手段、活動内容も含め協議が繰り返されました。だれも経験したことがない未曾有の被害がもたらされた被災地への支援。活動内容の決定には弘前市や市民団体、社会福祉協議会の方たちの意見が役立ったといいます。「もし、大学だけで向かっていれば、かえって被災地に迷惑をかけていたかもしれません。危険を伴う瓦礫撤去の際の注意事項や支援内容などを記したマニュアルを作り、移動のバスの中でしっかりオリエンテーションをしました。そうすることで、被災地がなにを求めているのか、自分たちがなにをすべきかが明確になったように思います。官民学のパワーが集結することで、野田村支援プロジェクトは 1人のけが人を出すことなく、現在に至っています。また、弘前市が財政面でバックアップしてくれたことも、大きな励みとなりました」と、語る李副センター長。

ボランティアで大切なのは「自ら行動すること」。震災から間もないころは、HUVCの活動を受け入れる心の余裕がなかった被災者とも、繰り返し足を運び、支援を続けることで少しずつ信頼関係が築かれていきました。また、支援者と被災者だけではなく、学

野田村での茶話会（鍋パーティー）の様子

野田中学校での学習会

弘前市での雪かきボランティア

大学会館2階に新設されたボランティアセンター

これまでのチーム・オール弘前の歩みを記録した3冊

生と弘前市民との交流も生まれました。「支援活動に同行した他大学の方に『この活動は被災地だけではなく、弘前大学にとっても価値のあることなんですね』と言われたことを鮮明に覚えています。学生はHUVCを通し、弘前市の住民であること、地域の一員であることを再認識したのではないでしょうか。この経験は彼らのこれからの人生にきっと役立つと信じています」。

支援から交流へ—HUVCが目指すもの

現在、野田村は少しずつではありますが復興が進んでいます。それに伴い、HUVCも瓦礫撤去や支援物資など力仕事中心の支援活動から交流活動に移行。活動内容は多岐にわたり、茶話会、児童クラブへの学習支援、農作業の手伝いなどが行われています。「お茶を飲みながら話を聞くことで笑顔が戻ると、自分のことのようにうれしいと話す学生たち。なかには個人的にすっかり仲良くなり、HUVCの活動に関係なく足を運んでいる学生や卒業生もいるようです。また、定期便では子どもたちへの学習支援も行われ、いっしょに遊んだり、勉強をみてあげたりしています。毎月やってくるお兄さん、お姉さんは、子どもたちにとって大切な存在になりつつあるのではないでしょうか」と、交流風景を語る大河原隆センター長。

一昨年10月、全学組織になったことを機に、雪かきのボランティアや、お祭りへの参加など、学部の垣根を超えた活動が広がっているHUVC。東日本大震災が発生したとき、即時に対応できなかったのは、こうした拠点がなかったことも大きな要因です。今後の活動についてお二人は「HUVCを支援の母体として確立し、災害時に即対応できる拠点だと認知してもらうこと。チーム・オール弘前の底力で、地域を守っていきたい」と力強く語っていました。

弘前大学理事・副学長
弘前大学ボランティアセンター長
大河原　隆（おおかわら　たかし）

1986年、青森県南津軽郡大鰐町助役。2000年、青森県商工労働部次長。2001年、青森県八戸市助役。2006年、青森県中小企業団体中央会副会長。2010年、弘前大学理事（併:副学長）。2012年弘前大学ボランティアセンター長。

弘前大学人文学部教授
弘前大学地域未来創生センター長
弘前大学ボランティアセンター副センター長
李　永俊（イ ヨンジュン）

1996年、名古屋大学経済学部卒業。2002年、名古屋大学経済学博士号取得。2002年、名古屋大学・国際経済動態研究センター講師を経て2003年、弘前大学人文学部講師、2004年、弘前大学人文学部助教授。2010年、弘前大学人文学部教授。

弘前大学東京事務所の紹介

本学は、従来より東京都江戸川区に東京事務所を設置しておりましたが、この度、機能強化を目的として、中央省庁からほど近い西新橋に新たに事務所を設置いたしました。

東京事務所は当面のミッションとして、以下の活動に取り組むこととしております。

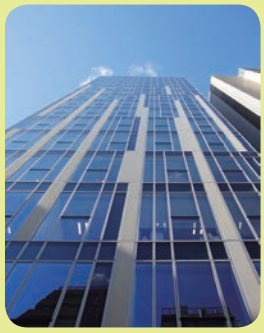
【弘前大学東京事務所のミッション】

1. 霞が関における将来の国の施策や予算の動向等に関する情報収集活動と研究戦略推進会議等への還元
   ①文部科学省等の審議会等における出席・資料収集・分析
   ②経済産業省・農林水産省ほかの外部資金等に関する説明会出席・資料収集・分析
2. 各種事業の推進や競争的資金獲得にむけた青森県東京事務所との連携活動
3. 産学官連携事業（科学技術相談、共同研究及び技術移転等）
   ①地域共同研究センターのマネジメント
   ②企業との連絡・調整
   ③コラボ産学官との連携に関する調整
   ④コラボ産学官参加大学との連携・情報交換
   ⑤その他東京事務所を置く他大学との連携・情報交換
4. 研究シーズ発表会、パネル展示会及び講演会等の実施
   ①新技術説明会 出展補助・情報収集
   ②コラボ産学官参加大学による研究成果発表会 出展補助・情報収集
   ③イノベーションジャパン出展補助・情報収集
   ④食品開発展 出展補助・情報収集
   ⑤バイオジャパン 出展補助・情報収集
   ⑥健康博覧会 出展補助・情報収集
   ⑦アグリビジネス創出フェア 出展補助・情報収集
5. 知的財産活動の促進

また、今後、就職活動支援及び同窓会活動との連携についても視野に入れ、活動に取り組む予定です。

東京事務所の概要は以下のとおりです。利用可能スペースがありますので、奮ってご活用ください。

【オフィスビル外観】



事務所内ミーティングスペースでは、無線LANがご利用いただけます。

職員が常駐しておりますので、お気軽にご連絡ください。

東京事務所の概要

（1）住所・連絡先
　住　　所：東京都港区西新橋1丁目18番6号
　「クロスオフィス内幸町」　7階　703号室
　電話番号：03-3519-5060
　E-mail：　j-tokyo@hirosaki-u.ac.jp
（2）利用時間等　　平日（月～金）の午前10時～午後6時まで
（3）利用可能範囲
　教職員の教育研究活動（打合せ、インターネット利用、資料印刷等）
（4）利用可能スペース
　①事務所内ミーティングスペース（6名まで）…利用料無料
　②クロスオフィス内幸町内会議室1F、8F（最大18名まで）…実費負担
　（※当面の間、無料）

弘前大学メールマガジン「ひろだいメルマガ」会員募集のお知らせ

弘前大学メールマガジン「ひろだいメルマガ」では、弘前大学への理解を深めてもらうことを目的として、最新の情報をメールで配信しています。
登録は簡単に出来ますので、配信を希望される方は、下記ＵＲＬより是非ご登録ください。購読は無料です。（登録はパソコンのアドレスでお願いします。）

「弘前大学教員紹介シリーズ」
弘前大学に在籍する先生の、研究内容はもちろん、趣味など、普段の授業では聞く事が出来ない情報も紹介します。

「今、この部活動・サークルがおもしろい」
学生記者がイチオシの部活動やサークルの活動内容などを詳しく紹介します。

「講演会・セミナー等のお知らせ」
予定されている講演会やセミナー等のスケジュールを紹介します。

詳細は、下記ＵＲＬをご確認ください。

ひろだいメルマガ　http://db.jm.hirosaki-u.ac.jp/magazine/

ひろだい vol.24
2015年３月発行
弘前大学総務部広報・国際課
表紙：弘前大学サイエンスパーク「フーコーの振り子」
「ひろだい」に関するご意見・ご感想をお聞かせください。
「ひろだい」はWebでもご覧いただけます。
下記URLからお進みください。

弘前大学
〒036-8560　青森県弘前市文京町1番地
Tel.0172-39-3012　Fax.0172-39-3498
E-mail：jm3012@hirosaki-u.ac.jp
http://www.hirosaki-u.ac.jp

ミックス 責任ある木質資源を使用した紙 FSC® C023138
VEGETABLE OIL INK